分野　教育・人材育成

キーワード　非ネイティブの意識／発音の窮境と究極／使える英語

英語教学法 英語学習法

人間形成教育センター
教授
徳山 瑞文
TOKUYAMA, Mizufumi

SDGs 関連項目

研究内容

英語に対する日本人のコンプレックスをテーマに研究している。2021年から大学入学共通テストの始まりをきっかけに、文法、訳読が中心だった英語教育の時代は終わった。この変化によって、中学・高校の英語授業に「聞く·話す·読む·書く」の英語4技能を活用した、使える英語を意識させる必要性が高まった。又、大勢の社会人が「英会話教室」に通って長年勉強しても、英語を話せる人が少ない現状に変わりはない。教育方法や教員養成のあり方など、いろいろ問題点はあるが一番大きな問題は日本人の英語に対するコンプレックスが存在していることである。そこでコンプレックスの要因となっている非ネイティブの意識、発音の窮境と究極、意味重視などを見直した英語教学法、学習法に取り組んでいる。

（1）非ネイティブの意識：100%完璧にネイティブスピーカーのように流暢な英語を求めている。完璧な英語を目指すよりも、多少の訛りが許される環境で劣等感を感じないよう、自然に自信を持てるように練習して行くことが大切である。

（2）発音の窮境と究極：日本語には外来語が多くて、英語の単語を発音するときに影響を受けていることは無視できない環境にあるが、中学生の英語授業では「発音記号」を本格的に指導することが重要である。

（3）使える英語：記憶の定着度アップするアウトプット練習方法をすることなく、日本語と英単語の意味を直訳して理解するような「知っている」だけの勉強方法を採用している。外国語の標準勉強法としての原則は四つの能力を同時に練習することである。

想定パートナー

自治体の教育委員会など

応用分野

教員の英語教授法、英会話の向上に取組む企業など

取組実績

【論文】

1. English Education of the New Century in Japan---Examination of ALT's Functions Through the Analyses of Junior High School New Textbooks and the New Strategies of English Education（Tottori University English Education Journal 2003）
2. Is It Necessary to Use “All English” for the Classes of ESL?（Oral Presented at No. 46 Research Presentation Program of the Chugoku Academic Society of English Language Education 2015）